



JIAMでは、令和7年7月23日～25日の3日間の日程で、「持続可能な地域社会の形成とダイバーシティ」をテーマに研修を実施し、「職場」「地域事業所」「地域住民」の視点からダイバーシティ推進に係る様々な課題を認識するとともに、これからの地域社会のあり方や自治体が各所と連携するための手法を考えました。

今回は、地域に潜む多様性を力に変えるべく、令和6年4月に「ダイバーシティ推進課」を設置し、ダイバーシティの視点を取り入れた施策展開を進めている宮城県仙台市の取り組みを紹介します。

# “ちがいを”を まちの力に!

## 地域に根を下ろすダイバーシティ



宮城県

仙台市

### 宮城県仙台市

人口109万4,799人・世帯数55万6,479世帯(令和7年10月1日現在)。  
宮城県中部に位置する県都・仙台市は、周辺市町村を含めて約153万人の仙台都市圏を形成する東北唯一の政令指定都市。“独眼竜”として知られる伊達政宗が開いた仙台藩の城下町として発展した。戦後は仙台駅西部を中心に道路や公園を整備、青葉山や広瀬川などの自然、ケヤキなどの街路樹とあいまって「杜の都」と称される都市景観を創出し、東北地方の中核都市として発展している。



伊達政宗公騎馬像  
(仙台城跡)



## 改めて気づいた地域の可能性

仙台市は、夏の「仙台七夕まつり」、冬の「SENDAI 光のページェント」をはじめ、多くの市民主体の都市イベントを創出している地としても知られる。市は、戦後早い時期から、市民と連携しながら「共生のまちづくり」を実践してきた。その施策に「ダイバーシティ（多様性）」を取り入れるため、令和6年4月「ダイバーシティ推進課」を設置した。

「ダイバーシティという言葉は知っている、具体的にどういうことなのか。『共生のまちづくり』を掲げる中で、何をどうすればよいのか、とにかく手探りで」と当時の心境を語るのは、同課の大沼由香里課長。市は国際会議への参加など国際的議論の場に触れる機会が多く、多様性に基づくまちづくりの必要性を痛感していた。令和5年には東北大学が国際卓越研究大学認定候補として選定され、外国人の増加が予想されるなど、ダイバーシティ推進へのベクトルが定まってきていた。



ダイバーシティ推進会議の開催 レイアウトは円形にこだわり、リラックスした中で活発な意見がでるよう、環境に配慮した。

## 取り組みの視点

基本的理念を踏まえ、施策を検討・実施する際に考慮すべき視点として以下の4つを掲げ、共通する事項として、デジタルをはじめとしたさまざまな技術の活用を位置づけます。



## 「仙台市ダイバーシティ推進指針」取り組みの視点

どのような考えの下でダイバーシティを推進していくか、その議論の場として「仙台市ダイバーシティ推進会議」が設置された。世代や性別、活動分野・場所も様々な学識経験者、実業家等で構成された委員は外国人を含む12人。「会議では話しやすい雰囲気づくりに気を配り、お菓子もたくさん用意しました（笑）。4回の会議の開催で多くの有意義な意見をいただくことができました」と大沼さん。「目からうろこ」の意見も多かったという。そのひとつが「とっておきの音楽祭」。障がいの有無にかかわらず、皆で音楽を楽しみ、心のバリアフリーを目指すストリート音楽祭で、運営には多くの市民ボランティアが参加し、平成13年から続く。「市民としては当たり前になっていた音楽祭が、他の

地域から見ると、珍しいものであることを知りました。音楽が盛んな仙台らしさがありますね。また、バリアフリーのまちづくりの先鞭をつけたのは、仙台市で始まった生活圏拡張運動(\*)です。市にはすでにダイバーシティの素地があることに気づかされました」。

会議で議論を重ねる一方、市民向けに「仙台ダイバーシティフェスタ」を開催、パブリックコメントなどの意見を踏まえ、令和7年3月、4つの視点を掲げた「仙台市ダイバーシティ推進指針」を策定した（上図参照）。

\*生活圏拡張運動 昭和44年、仙台市で1人の車いす利用者と1人の学生ボランティアから始まった福祉のまちづくり運動。その後全国的に展開された。



とっておきの音楽祭 平成13年に仙台に始まったこの催しは、現在、全国で延べ31か所以上で開催されている。この趣旨の音楽祭では全国最大規模となった。（写真提供：とっておきの音楽祭実行委員会 SENDAI）

## ダイバーシティを施策に織り込む

「仙台らしいダイバーシティまちづくり」を掲げた推進指針に基づき、市は、あらゆる施策にダイバーシティの視点を織り込むため、「仙台市ダイバーシティ推進本部」を設置し、全庁的な推進体制を整えた。トップセミナーや一般職員への研修に始まり、「推進指針に込めた思いを全庁に認識してもらうため、個別部署との対話を徹底して行っています」と大沼さん。「最初は困惑され、それまでの取り組みとどう違うのかという意見が多かったですね。そのため積極的に意見交換をし、優先順位を考えて取り入れる具体的方法を一緒に考え、話し合いを重ねています。公園や緑地の計画を担当

高砂中央公園内のインクルーシブ遊具空間  
障がいの有無を問わず、誰もが安全に安心して楽しめる遊具を備えている。



する部署では、バリアフリーに対応すればそれでよしとするのではなく、外国人や若者などにも意見を聴き、公園や緑地のあり方を考えようという行動につなげてくれました」。勉強会開催を要望してくる部署もあった。また、施策が指針のどこにつながるかを自主的に整理し、計画に取り入れたケースもあったという。いま各部署がダイバーシティの視点に立って考える姿勢をもち、計画の改定に臨む動きが見えてきている。



多様性を体感できる1dayイベント「仙台ダイバーシティフェスタ」  
せんだいメディアテークで開催。令和7年で2回目。こどもから大人まで、誰でも楽しみながら、様々な「ちがい」を体感でき、アートワークショップや世界の遊びなどに気軽に触れるイベントとなっている。



ダイバーシティに関する実地の施策も動き始めている。例えば各地で増加する外国人に対する課題がある。「地域の役に立ちたい、文化を知りたいという外国人からの声を受け、具体的な支援を行っています」として挙げられたのが、外国人が地域と気軽に交流できる事業。商店街との交流では、地域の昔話を紹介した紙芝居の翻訳を留学生と一緒に手がけたほか、地域を知ってもらうための商店街めぐりを実施した。また、地元の大学の協力を得て、案内サインを多言語で作成し、その分かりやすさを検証するため、留学生によるまち歩きを開催した。

多文化共生施策は他部署が所管しているが、ダイバーシティ推進課では、外国人の意見やニーズを基礎資料としてまとめるため、令和7年度に外国人住民の実態調査を実施した。外国人が求めていることの実態がわからなければ

施策は立案できない。

「ダイバーシティという言葉は抽象的でわかりにくいと思われませんが、『ちがい』を認め合い、尊重することはこれまで行われていたこと。話を聞くことで、こういうことで困っていた人がいたのかと、見えていなかった社会課題に気づくことができるようになる」と語る大沼さん。声は、聞く耳のあるところに届けられる。



個別部署とのダイバーシティ勉強会の実施



地域の昔話を紹介する紙芝居の翻訳作業



留学生による多言語案内サインの検証



専門家を招いたジェンダード・イノベーションに関するワークショップ

ニューロダイバージェント人材の活躍に向けた連携に関する協定



## 多様性を力に変える取り組み

市は、産学官連携の枠組みである「仙台市×東北大学スマートフロンティア協議会」において、専門家の協力を得ながら、ジェンダード・イノベーション(\*)の視点を取り入れた開発を行う企業への支援に動いている。

また、令和7年11月には、dentsu Japan と「ニューロダイバージェント人材の活躍に向けた連携に関する協定」を締結した。東北大学や企業と協力し、自閉症や注意欠如・多動症 (ADHD) などの発達特性をもつ人材が活躍できるよう、より働きやすい環境づくりに向けた実証実験などを実施する。「人が組織に合わせる社会から、組織が人に合わせる社会へ。多様な発達特性をもつ人が能力を発揮する環境ができれば、それは地域の新しい力になっていきます」と未来像を描く。推進指針に基づくこれらの取り組みに注力し、地域へ還元していけば、新たな事業展開の場として仙台に目を向ける事業者もあるに違いない。

このような中、大沼さんが思い出す

ことがある。推進会議でのこと、「世界に通じるダイバーシティ」という文言を提案したとき、委員から「見るのは世界ではなく、足元の仙台!」と指摘された。改めて地元を見つめ直すと、ダイバーシティのヒントは容易に見えてきた。冒頭に挙げた仙台七夕まつりや光のページの始まりには地域主体の動きがあった。市民が主体的に取り組む歴史があり、相互の立場を思いやる協働の文化があった。その延長線上にダイバーシティの視点を取り入れることで、誰もが活躍できるまちの実現というビジョンが見えてきたのだ。

「これまでは準備期間。これからが本番です。取り残される人がいないか常に目を配りながら、笑顔あふれるまちにしていきたい」と語る大沼さんに、ダイバーシティに取り組むために必要なことは何かを聞いた。「まず足元を見つめ直すことです。自分たちの地域にどういうダイバーシティの素地があるのか、内外の知見を活用し、地域を知ることだと思います。地域それぞれにダイバーシティの姿があり、大きな可能性があ

る。地域に根ざし、住民の活動に目を凝らした創意工夫と多様な知見をもってダイバーシティを考え、取り組む。結果として地域が豊かな幸福に包まれるれば、その幸せを世界が認めるのである。

取り組むべき地域課題にアプローチするも、解決が見通せないテーマを抱える自治体は多い。その新しいアプローチ法として、ダイバーシティの視点を取り入れてみてはいかがだろうか。

\*ジェンダード・イノベーション 製品やサービスにおいて、これまで考慮されてこなかった性差や年齢などのちがいを分析し、開発に生かす考え方。新たな視点が加わることで、より良い開発・改良となることが期待される。

【取材・写真提供 仙台市まちづくり政策局政策企画部ダイバーシティ推進課】



多様な市民が集まる拠点せんだいメディアテーク 世界的な建築家・伊東豊雄氏の代表作。芸術性の高い空間に図書館やギャラリーなど多彩な機能を擁し、様々なイベントが開催されている。



「仙台ダイバーシティフェスタ 2025」市民がつくる立体モニュメント制作の様子